



NewsLetter

vol.10

シェルター「丘のいえ」だより⑦ ●
 パオな人インタビュー:杉浦宇子さん ●
 私が出会った子どもたち④ ●



パオの
 現いま

シェルター「丘のいえ」だより⑦

深夜のケーキづくり

「〇〇した方がいいよ」。

丘のいえでの、私の何気ない言葉に、利用者の1人だった彼女は、感情をあらわにしてきました。精神的な虐待を受けた親戚を思い出したようで、親戚とのトラウマにフラッシュバックが起きたようです。

丘のいえの非常勤スタッフとして、夕方から翌日昼ごろまでの時間帯で月数回、利用者さんと過ごす私は、「居場所のない彼女たちが安心して過ごすことのできる場所」

「ほっとできるシェルターづくり」を目指しました。

「彼女たちのほっとできる場所」とは何だろう、私のできることを模索しながらの支援が続きました。初めは従来のシェルター機能にとられすぎになり、最小限の約束や生活リズムは必要ではと意識していました。でもあまり固定概念にとらわれて接すると、10代半ばから後半の彼女たちにとっては、抑え付けられた環境となり、自分の意志ではない生活になってしまうことを痛感しました。

「〇〇した方がいいよ」は支援する側に都合の良い言葉の使い方だったに違いありません。彼女たちにとっては、「こうしよう」「ああしよう」ではなく、選択肢があって自分で選び取れるような言葉がけの必要がある、そこから自分がどうしたいのか、自分の気持ちを表現していけるようになって感じました。生活の支援だけでなく、精神的なケアもシェルタースタッフの重要な役割だとも感じました。

一人ひとりの旅立ちの中で、焦らず、ゆっくり、自分のペースで生活ができる雰囲気の中で、関わろう。そう思ったら、私の気持ちも楽になり、ゆとりができました。初めは昼夜逆転になってもいい、彼女たちの意思での生活に寄り添おうと決めました。

単発的に生活を共にする私は、気軽に日常を過ごせる

相手として、利用者さんたちの抱えるさまざまな事情をあえて知らないこととして、こちらから言ったり、聞かないようにも努めました。

彼女たちの親以上の年齢の私にできることは何か。同じ女性として考えながら、お菓子作りをはじめ、編み物、布草履作り、工作など、楽しくできることを一緒にやっていきました。彼女たちがしたいという気持ちになったのを大事にしたくて、深夜にケーキを作ったこともありました。パズルを完成する目標を立てた利用者さんと朝方まで頑張ったこともあります。

私の自己満足だったかもしれませんが、大人たちに不信感を持ってしまっている彼女たちに対して約束したことは守りたい、彼女たちが決めたことであれば、最後まで応援したいと思いました。楽しみの中で、言葉がたくさん出てこればいいな、出来ることが増えて行くことで、次のステップが広がればうれしいなと思いました。

丘のいえからの旅立ちの中で、利用者さんたちを支える弁護士たちの「どんな状況でも彼女たちを守る。見捨てない」という強い気持ちが彼女たちに伝わっていくのがよく分かります。私も「最後まであなたを信じています。守ります」という気持ちを持ちながら、大人の身勝手な行動で振り回さないよう、「彼女たちの最善の利益」になるように、接していきたいと思っています。

(丘のいえボランティアスタッフ・T)

